

本サービスにおける著作権および一切の権利はアイティメディア株式会社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスの出力結果を無断で複写・複製・転載・転用・頒布等を行うことは、法律で認められた場合を除き禁じます。

「英語に愛されないエンジニア」のための新行動論(23):

もしも、あなたの大事な人が海外赴任になったなら

<http://eetimes.jp/ee/articles/1402/19/news019.html>

海外赴任というのは、多かれ少なかれ周りの人間を巻き込みます。そして、赴任するのが「英語に愛されないエンジニア」である場合、周りは、巻き込まれるばかりか、赴任する本人を“守る”という使命まで負う可能性もあります。今回は、海外に赴任する「英語に愛されないエンジニア」が、(1)自分自身である、(2)恋人である、(3)夫あるいは妻である、(4)親である、という4つの視点に立って、“守る方法”を検証します。

2014年02月20日 11時30分 更新

[EE Times Japan]

われわれエンジニアは、エンジニアである以上、どのような形であれ、いずれ国外に追い出される……。いかに立ち向かうか?→「[『英語に愛されないエンジニア』のための新行動論](#)」連載一覧

海外赴任は、チャンス?

長期の海外出張や赴任は、未婚者にとっては千載一遇のチャンスです。

「好きです。結婚して、外国に一緒に来てください」

という告白が可能な状況になるからです。

しかし、「告白される側」にだって事情があるので、そんな簡単にYesともNoとも言えません———というか、「バカじゃん?」という答えが返ってくる可能性の方が大きいです。

しかし、それでも「告白する側」にはメリットがあります。

もちろん、“Yes”と言ってもらえれば目的達成。“No”であっても、職場で気まずい思いをすることもなく、海外に逃亡できるのです。「振り逃げ」ならぬ、「振られ逃げ」です。しかも、振られた理由を「海外」にする言い訳もできます。

卒業式の後の告白のようなものですが、どさくさに紛れてプロポーズまで持ち込める分だけ、メリットは大きいです。海外赴任という不幸も、使い方によっては、私益をはかることができます。

一方、「告白される側」にとっては、このような申し出はひどく迷惑なものでしょう。自分で培ってきた生活のインフラ(自分の仕事、住居、人間関係)を、一時的であれ放棄することになります。他人の都合で、言葉も通じない国に行かされる不条理に、おいそれと乗れるものではありません。

それに、言葉の問題だけではありません。海外の住居などの生活インフラや、安全、安心、教育、その他の面倒くささを考えれば、海外赴任に巻き込まれる人間としては、「何言ってるの?」という気持ちになるのは当然のことだと思うのです。

さらに、もっと根本的で、本質的な疑問が残っています。

そもそも、あなた、「英語に愛されないエンジニア」じゃなかったっけ?

「英語に愛されないエンジニア」の守り方

こんにちは。江端智一です。

今回は、ちょっと趣向を変えまして、「英語に愛されないエンジニア」に巻き込まれる方々に着目してみたいと思います。

といっても、「英語に愛されないエンジニア」の関係者というだけで、いきなり迷惑を被るわけではありません。

問題なのは、この「英語に愛されないエンジニア」とともに、外国に飛ばされる羽目になるときです。つまり、「海外赴任」の場面で、この迷惑はいきなり現実味を帯びてくるわけです。

あなたが、「英語に“愛されている”エンジニア」とともに海外赴任するのであれば、それほど心配しなくても良いかもしれません。あるいは、あなた自身が英語に愛されている人物であれば、当然、何の問題もないでしょう。

問題は、「英語に愛されていないチーム」で海外に赴任する場合です。それはもう、登山を開始する前から遭難が確定している山岳登山チームのようなものです。

「英語に愛されないエンジニア」に巻き込まれるおそれのある人は、「単独で山頂アタックしてきてね。ベースキャンプから見ているよ!」と、明るい声で彼らを見捨てるのも1つの方法です。

しかし、彼らがアタックに失敗し、死んだ魚のような目をして帰国した揚げ句、廃人同様となり、労働力として使いものにならなくなったら、あなたも困ることになるかもしれません。

「英語に愛されないエンジニア」を海外に放置しておく、面倒なことになる可能性は高いのです。

そこで今回は、「英語に愛されないエンジニアの守り方」について考えてみたいと思います。

(ケース1)「英語に愛されないエンジニア」が自分自身である場合

今や、製造業の会社で、国内需要に期待しているところはありません。どの会社も、海外売り

上げを増やして生き残りを図ろうとしています。そのためには、多くの社員を海外に赴任させなければなりません。

しかし、海外赴任がエリートコースで、帰国後の昇進が約束されていたという時代は、とうの昔に終わりました(例えば、私[江端]を見てきた多くの若いエンジニアたちは、その事実を熟知している)。

こうなってくると会社は、もう本人の資質(例:英会話スキル)などを問わずに、「取りあえず現地に飛ばす。そこでつぶれたら、その時考える」という、“OJT(On the Job Training)”という名の場当たり作戦を発動せざるを得ません。

これに対して、「英語に愛されないエンジニア」であるあなたは、次のような手段で自分自身を守るようになります。

未婚者であれば「治安が悪いので親が反対している」、既婚者であれば「子どもの教育があるので」という理由で断りを入れてみます。または親御さんに不治の病になっていただくという手もあるでしょう(「余命50年」とすれば、うそにはならない)。

当然、会社はあなたの説得にかかるでしょう。必要なら、「業務命令」を振りかざしてくる可能性もあります。うそくさいキャリアパスの空手形を発行するかもしれません(私なら、そうする)。

これに対抗するには、「異動を申し出る」とか、最悪の場合、「退職をほのめかす」などもあります。

しかし、いずれも、退職をかけたリスクの高い対抗策となります。「海外赴任なんて死んでも嫌」という人以外には、あまりお勧めできない方法です。

(ケース2)「英語に愛されないエンジニア」が恋人である場合



画像はイメージです

あなたは、高い確率で、上記の「プロポーズ攻撃」を受ける可能性が高いです。『恋人にいざなわれて、外国に旅立つカップル』。もう気分は、恋愛ドラマの主人公です(男性の場合は、ちょっと違うかもしれませんが)。

しかし、ここは落ち着いて、じっくりと彼または彼女の様子を伺いましょう。

あなたの恋人は、海外で一人で暮らすのが怖くて、単に「仲間」を求めているだけかもしれません。そもそも、そういうタイミングでプロポーズしてくること自体に、既に「負け犬」根性が垣間見えます。あなたを「愛している」どころか、「一人で荒野に立つ勇気もないヘタレ」という、悪意ある解釈も可能です。

しかし、それを全て承知した上で、あえて恋人と海外で新しい生活を始めるという選択肢もあるでしょう。

あなたが結婚を望んでいるのにもかかわらず、彼または彼女が、なかなかプロポーズしない、またはプロポーズを受けてくれないのであれば、これは彼らが隙を見せるレアなケースです。ここに付け入るのは、戦略的に悪くありません。

それに、私の試算では、未婚率はこれからも一方的に増加していくようです。もはや、結婚へのモチベーションは「非日常」なくしては発動しないような気がします。

いずれにしても、それがあなたの緻密に計算された戦略の結果であったとしても、結果として「英語に愛されないエンジニア」を守ってもらえるのであれば、それはそれでよいのです。

(ケース3)「英語に愛されないエンジニア」がパートナーである場合

あなたが望まないのであれば、無理せず、単身赴任していただきますよう。一緒に赴任して、パートナーともども自滅する必要はないからです。

これは嫁さんに聞いた実話なのですが、ニューヨークに赴任となった旦那さんに随伴した奥さんが、街が怖くて一步も外出できず、それをパートナーにも理解してもらえず、一人で放置された結果うつ病になり、最終的に離婚に至ったそうです。

また、世界中どこにいても、「日本人コミュニティ」を作って地元の日本人を仕切りたがる人がいるのだそうです。その人は日本人が現地の人と交流することを好まず、「昨日の午後はいなかったわよね。どこに行っていたの？誰と遊んでいたの？」と、やたら人のプライベートに干渉してくるのだそうです。

『私が誰と何をしようが、アンタの知ったことか!!』と怒鳴りそうになっても、そのコミュニティの仕切り屋がパートナーの上司の奥さんだったため、角を立てるわけにもいかず、ひどいストレスになったそうです。

しかし、『なんで海外に行ってまで、日本人同士で固まろうとするのかなあ』と思うのですが、もちろん、その奥さんも「英語に愛されない奥さん」であるからです。

「英語に愛されない」ことは、全ての不幸につながっているようです。

ただですね、あなたが望むのであれば、無理をする価値もあります。

私の経験ですが、海外赴任というのは「夫婦の絆を強くする」というような、甘っちょろい表現では足りず、夫婦を「死線をかいくぐって生き残った戦友」という関係にまで昇華させることができます。

日常生活においてトラブルが発生しても、「それ、アナタのせいでしょう？」などと、のんきに相手を責めている余裕など全くありません。「援護を頼む!」と叫びながら、夫婦でトラブルに突っ

込んでいくしかないのです。

脱水症状でグッタリした2歳の娘を抱きかかえて救急病院まで運び、医師の説明を、夫婦で命懸けでヒアリングし、聞いたこともない名前の飲料水を書いた英語のメモを握りしめて、深夜の街中を夫婦で走り回った日々は、今思い出しても胸が締め付けられる体験です。

どこに行くにも夫婦で行動しました。英語に愛されない人間でも、二人なら担当を分担できるからです(嫁さんがヒアリングで、私がスピーキングという担当が多かった)。

嫁さんは、私と同様に「英語に愛されない」という不幸を持ってはいましたが、——「コイツになら背中を預けられる」という絶対的な信頼感で —— 私を守ってくれていたのです。

(ケース4)「英語に愛されないエンジニア」が親である場合

お父さんやお母さんの勝手な都合で、学校を転校させられ、友達と別れさせられるだけでも、十分にひどい話なのに、「言葉の通じない国」に強制連行させられる —— 理不尽、ここに極めり、です。

大人はいつだって、勝手なことを言います。「見聞が広がる」だの、「語学の勉強になる」だの、「ガイジンの友人ができる」だの、誰がいつそんなことを頼んだ? —— と、考えているだろうあなたに、まず、お父さんとお母さんの海外赴任プランをたたきつぶす方法を伝授しておきます。

最も効果的なキーワードは、「勉強についていけなくなる」とか「受験に不利になる」です。加えて、「日本に戻ってきたとき、私はどうなるの」といって、海外赴任の無計画性を非難します。

それでもダメなら、友人や学校関係者を巻き込み、騒ぎを大きくしましょう。不登校、エスケープ、教師への反抗、教室の窓ガラスの破壊、その他、問題のある行動に出ましょう。可能なら、学校医に「心の病」の心証を抱かせれば、おおむねあなたの勝ちです。



とどめは、お父さんの会社の上司に、「私は友達と別れたくないんです」と泣いて頼めば、この海外赴任の話は確実につぶせます(ただし、お父さんの単身赴任の線は残りますが)。

ただですね、海外赴任は、あなたにとって全くうまみがないわけではありません。

それは、「ファニーな仮装をした海外のクリスマスパーティの写真を、日本の友人に配れる」というような、そういうチンケなメリットの話ではありません(逆に嫌われる)。

日本には、「帰国子女枠」という不思議な受験優遇制度があります。条件は受験する学校によっていろいろありますが、一定期間海外にいただけ(←ここ重要)で、受験を免除される場合

があるのです。

それと(あなたにとってメリットにはならないかもしれませんが)、テレビ、ゲーム、コミックなど、学習を妨げるような娯楽が手に入りやすく、治安の関係から外で遊ぶ機会が少ないため、結果として勉強時間が増えてしまいます。

また、外国語を使わないと生活できないという、完璧な語学学習環境が提供されます。買い物一つのために、現地の言葉を何度も繰り返し練習する環境は、あなたの語学能力を爆発的に引き上げるでしょう。

その逆に、人のウワサ話が全く聞こえない(理解できない)状況や、例えコミュニティーに入れなくても、そこにひとかけらの悪意もない日々は、下手をすると日本の学校の生活より「幸せ」だったりもするかもしれません。

さらに、あなたのことで引け目を感じているお父さんやお母さんは、ことのほか、あなたのことを気にかけますので、海外赴任中の日常生活で、大抵のわがままが通るというメリットもあります。

そして、お父さんとお母さんは、あなたを守るという目的を与えられて、海外生活の日々を生き抜くことができます。つまり、“あなた自身がそこにいること”が、「英語に愛されない」お父さんやお母さんを守っているのです。

こうした事例で考えてみますと、「英語に愛されないエンジニアを守る」ための、特別な方法などないようです。海外赴任で、家族が一つになって幸せに過ごせるか、あるいは最悪、家族崩壊に至るかは、単なる「運」のようも思えます。

しかし、

- (1) 英語に愛されないまま海外の地で生き延びるためには、「“英語に愛されない者たち”が協力して、その時できることを、何も考えずに場当たり的にやっていく」しか方法がない
- (2) そのようにして日々を過ごした先には、何かいいことがあります

ということだけは、いえるような気がします。

□

さて、長く続いたこの連載も、次回が最終回となります。

私たちは日本に帰国し、仕事の仕上げに取りかかります。いわゆる業務報告です。

会社の命令によって出張してきた以上、報告は客観的かつ具体的に行う必要があります。ただし、今回は、「あなた以外は、誰もその場にいなかった」という事実スポットを当て、「どんな報告をしたところで、誰にも分かりやしない」という観点から、報告書の作成または報告会のプレゼンテーションについて論じます。

併せて、十分なサポートを行うことなく私たちが海外に送り込んだ者たちへの、ささやかな報復についても論じたいと思います。

「英語に愛されないエンジニア」の為の新行動論(最終回)「報告編」をお楽しみに。

本連載は、毎月1回公開予定です。[アイティメディアID](#)の登録会員の皆さまは、下記のリンクから、公開時にメールでお知らせする「連載アラート」に登録できます。



Profile

江端智一(えばたともいち) [@Tomoichi_Ebata](#)

日本の大手総合電機メーカーの主任研究員。1991年に入社。「サンマとサバ」を2種類のセンサーだけで判別するという電子レンジの食品自動判別アルゴリズムの発明を皮切りに、エンジン制御からネットワーク監視、無線ネットワーク、屋内GPS、鉄道システムまで幅広い分野の研究開発に携わる。

意外な視点から繰り出される特許発明には定評が高く、特許権に関して強いこだわりを持つ。特に熾烈(しれつ)を極めた海外特許庁との戦いにおいて、審査官を交代させるまで戦い抜いて特許査定を奪取した話は、今なお伝説として「本人」が語り継いでいる。共同研究のために赴任した米国での2年間の生活では、会話の1割の単語だけを拾って残りの9割を推測し、相手の言っている内容を理解しないで会話を強行するという希少な能力を獲得し、凱旋帰国。

私生活においては、辛辣(しんらつ)な切り口で語られるエッセイをWebサイト「[江端さんのホームページ](#)」で発表し続け、カルト的なファンから圧倒的な支持を得ている。また週末には、LANを敷設するために自宅の庭に穴を掘り、侵入検知センサーを設置し、24時間体制のホームセキュリティシステムを構築することを趣味としている。このシステムは現在も拡張を続けており、その完成形態は「本人」も知らない。

本連載の内容は、個人の意見および見解であり、所属する組織を代表したものではありません。

関連リンク

[筆者の個人Webサイト「江端さんのホームページ」](#)

Copyright© 2016 ITmedia, Inc. All Rights Reserved.



